

# 聖山の景観認識とコスモロジー

—奄美地方・加計呂麻島のカミ山を事例として—

同志社女子大学・現代社会学部・准教授

大西秀之

## 1. 万葉人の景観認識

万葉集には、さまざまな地位や地域の人びとが、自然や四季を愛で詠んだ数多くの歌が収められている。実際、万葉集のなかには、多種多様な山河風水や動植物さらには自然現象までを含む自然景観が歌の題材として詠まれている。

しかし、万葉集の歌人たちは、自らの感性の趣くまま、身の周りのすべての自然景観を題材としたか、とさえそうではない。万葉の歌人は、必ずしも歌の題材として、ありとあらゆる自然景観をすべて詠んだわけではないようである。

このことは、動物行動学者である日高敏隆が指摘した端的な事例によって、疑いようもない事実として確認することができる。それは、万葉集には「蝶（チョウ）」を詠んだ歌が一首も無い、という指摘である〔日高2003:80-82〕。いうまでもなく、万葉集の歌人たちが生きた時代に蝶がいなかったわけではない。というのも、万葉集のなかには、大伴家持が歌の説明文として記した漢文のなかに蝶が登場するからである〔日高2003:80〕。このことから、決して万葉の歌人たちが、蝶を知らなかったわけでも、ましてや蝶を見たことがなかったわけでもないことを窺い知ることができる<sup>1)</sup>。

とすれば、考えられる可能性は一つしかない。それは、万葉の歌人にとって、蝶が歌の題材とは認識されていなかった、という可能性である。こうした万葉集の歌人たちの自然景観に対する認識は、現代のわれわれの感覚と非常に異なるものである。さらには、この景観認識は、万葉集以後に編纂された古今集のなかに蝶を詠んだ歌が少なからず認められることから、その後の時代には継承されず変容していたことが窺える。

## 2. 環境認識の解明に向けて

### (1) 景観認識とは

景観認識とは、単なる五感を通して知覚した物理的な自然環境そのものではない〔Tress et al 2001〕。われわれの景観認識には、常に文化的・社会的な意味が読み込まれた価値観ないしは判断基準が介在している、と見なすべきである〔Antrop 2000; Tress et al 2005〕。

というのも、人間は、同じ自然環境を見たとたしても、それを見た全員が同じ認識を持つとは限らないからである<sup>2)</sup>。たとえば、ある信仰を共有する信者たちにとっての掛け替えのない聖地が、それ以外の人物にとっては、なんの変哲もない小山や小川に過ぎないことは決して珍しくない。この事例からもわかるように、人間は、同じ自然環境に対置しても、まったく異なる「世界観（コスモロジー）」のなかに存在している可能性がある。いやむしろ、文化・社会が異なれば景観認識も異なる、という方が常態である。

であるならば、万葉集の歌の題材を選定する景観認識は、当時の歌人たちの文化・社会における世界観（コスモロジー）が、なんらかの形で反映されていることとなる。とすると、万葉集の歌人たちが共有していた景観認識は、いかなる世界観に根差したものであり、またそれはどのような文化・社

会的背景から生み出されたものであるか、という疑問を問いたくなる。

## (2) 万葉世界と山の景観認識

万葉集には、三輪山、大和三山（畝傍山、香具山、耳成山）、富士山、生駒山、二上山などの「特定の山」を詠んだ数々の和歌が収められている。こうした山々が歌の題材に選定されている理由は、単に姿かたちが美しいなどとの理由ではなく、当時から人びとの信仰の対象となる場であったことが影響している、との指摘が少なからずなされてきた。実際、これらの山々は、現在でも霊山や御神体などとして信仰を集める地となっている<sup>3)</sup>。

以上から、ある特定の山を歌の題材とする歌人たちの景観認識の背景には、彼ら彼女らが有していた信仰体系に基づく世界観（コスモロジー）が深く関与している可能性がある。こうしたことを踏まえ、本稿では、ある特定の山を歌の題材とした万葉集の歌人たちの景観認識が、どのような信仰体系に基づく世界観（コスモロジー）を背景としていたか、という問いを念頭に置きつつ、鹿児島県奄美地方の加計呂麻島の伝統信仰に関連する山の景観認識と、その文化・社会的背景となる世界観（コスモロジー）を追究する。

奄美地方を対象とする理由は、同地域が「万葉集の世界と直接的な系譜関係がある」とか、ましてや「その基層文化を見出すことができる」などといった見解・仮設に立脚するものではない。あくまでも、同地域が、山に対する景観認識と伝統信仰に基づく世界観（コスモロジー）の関係性を見出すことが、今日においてもなんとか可能な地域コミュニティがわずかながら存在しているからにほかならない。したがって、本稿の奄美・加計呂麻島での検討の結果そのものが、万葉集の世界を直接的に明らかにすることはしない。むしろ、その検討を通して得られた成果を、万葉集の世界を読み解くための視点やモデルとして用いることによって、その歌人たちが共有していた景観認識や世界観にアプローチするための、ひとつの切り口となることを提示する。

## 3. 奄美地方・加計呂麻島

### (1) 奄美地方の概要

奄美地方は、鹿児島県トカラ列島と沖縄本島の間位置する大小さまざまな島によって構成される島嶼群の総称である。同地域は、行政区分上は鹿児島県大島郡に属する。大島郡は、2006年の町村合併によって、笠利町と住用村が名瀬市と合併し奄美市が発足した結果、現在は9町2村（喜界町、龍郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町、天城町、徳之島町、伊仙町、知名町、和泊町、与論町）の自治体で構成されている。なお、同地域は、一般的に「奄美諸島」または「奄美地方」などと呼称されることが多いが、それらの表記は日本法令では用いられず、「奄美群島」が統一的に使用されている。

奄美地方の気候区分は、亜熱帯に属し通年温暖な気候である。また、同地域は、アマミノクロウサギを代表とする地域固有の動植物種が数多く、それらの動植物種が生息する生態環境の多様性などから「東洋のガラパゴス」と称されている〔鮫島1995〕。

ところで、奄美地方は、中世以降、さまざまな政権によって支配されてきた。まず、同地域は、15世紀以降、琉球王朝の統治下におかれる。次いで、1609年の薩摩藩の琉球侵攻によって、奄美地方は、薩摩藩の直轄地として直接支配下に置かれ、そのまま明治維新を迎えることにより廃藩置県によって鹿児島県の一地域となる。さらに、第二次世界大戦後は、沖縄県とともにアメリカ軍による軍政統治下に一時的（1946年2月2日～1953年12月25日）に組み込まれる。ちなみに、このような被支配の歴史を、同地域では、琉球による支配を「那覇世」、薩摩藩支配を「大和世」、米軍統治期を「アメリカ世」とそれぞれ呼称する独自の時代区分が提唱されている〔穂積2000〕<sup>4)</sup>。

他方で、奄美地方は、古来より日本本土や沖縄諸島との交易が活発に行われ、両地域の文物を橋渡しする要の地として重要な役割を果たしてきたことが、考古学的な調査研究によって明らかにされている [高梨2005]。このため、同地方では、言語や信仰などといった様々な文化的側面において、九州以北の「ヤマト」と沖縄本島以南の「琉球」の文化的要素が混雑する独特の性質を見出すことができる。

## (2) 加計呂麻島について

本稿で調査対象とする加計呂麻島は、奄美群島で4番目の大きさとなる面積約77.39km<sup>2</sup>であり、大島海峡をはさんで奄美群島で最大の面積と人口を誇る奄美大島の南岸と向き合う位置にある（北緯28度～28度15分、東経129度8分～129度26分）(図1)。その地形は、大部分が山地であり、沿岸部は複雑に入り組んだリアス式海岸で、147.5kmの海岸線長を有する。くわえて、同島の土地のほとんどは、林野が占めていることから、可住地域は海岸沿いの非常に限られた一部にしかない。

上記のような地理的要因のため、島内に走る公道は険しさを極めるとともに、海上の交通手段も限られているため、隣接する集落間の移動は現在でも容易ではない。こうした地理的要因は、同じ島内に在りながら集落単位の社会的・文化的な独自性が強く、習俗や生計選択などにおいても顕著な差異が認められる、という状況を生じさせてきた。

加計呂麻島の人口は、2008年時点で1555人（男性726人、女性829人）、世帯数は935戸である。また、同島には、現在32集落が存在している。くわえて、これらの集落は、基本的にすべて近世末から存続してきたことが確認されている。

こうした背景から、加計呂麻島は、奄美群島から琉球列島全域に広がる伝統的信仰である「ノロ祭祀」をはじめとする習俗などが、同地域のなかでも比較的近年まで維持されてきた土地として知られている。なかでも、加計呂麻島の北西部は、ノロ祭祀をはじめとする「伝統的」とされる風俗・慣習が、島内でも比較的遅くまで存続していた地域である。この理由は、薩摩藩制時代より開発が進められた南東部に比べると、北西部は開発が相対的に遅れたためである。このような背景から、同島北西部では伝統的な信仰や習俗を対象とした調査が行われてきた [クライナー1977;松原・高橋1998;松原2004]。

しかしながら、上記のような加計呂麻島の歴史的・文化的背景も、国内各地の離島と同じく、たぶんにもれず急速な変化のただなかにある。とくに、近年は、これまでの過疎化・高齢化やライフスタイルの変容などに加え、行政サービスの再編・統廃合によって、地域コミュニティそのものの維持が困難となる集落が、早晩少なからずでてくる危険性を孕んでいる。

## 4. 加計呂麻島の景観認識と伝統信仰

### (1) カミ山と中核とする景観認識

奄美地方・加計呂麻島には、当該地域の山の景観認識を考える上で興味深い、「カミ山」という場所・空間が存在している。カミ山とは、一般的に奄美地域の伝統文化に密着した信仰対象の土地として、

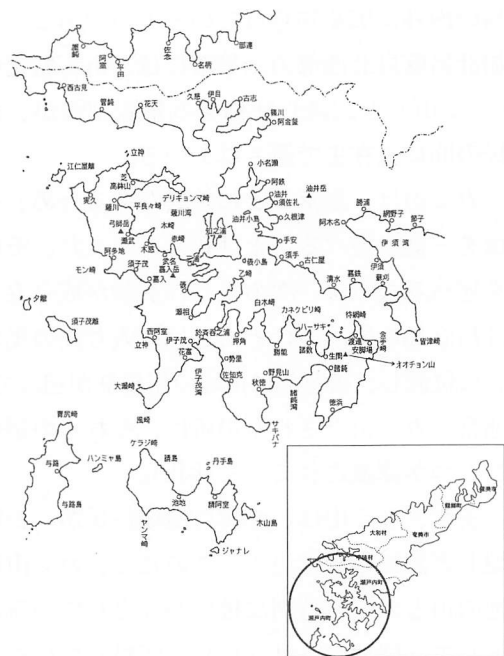


図1 加計呂麻島

島の内外に広く知られているものである。実際、加計呂麻島北西部の全集落には、ある特定の山を「カミ山」と認識し呼称する景観認識が、地域住民の間に現在まで遺されている。

カミ山は、集落ごとに差異があるため、その特徴を一概に述べることは難しい。ただ、その概略を述べるならば、次のような解説が成り立つ。加計呂麻島の集落のほとんどは、入り江の奥の海沿いに位置し、後背部に山地の尾根筋が迫っている。通常、カミ山とされる場所は、それらの尾根筋のひとつが認識されている(図2)。



図2 加計呂麻島・芝集落のカミ山

また、カミ山は、一般に地域住民から畏敬の念を払うべき「聖地」と認識されている。このため、カミ山は、集落の住民から、他の山とは違う特別な扱いがなされている。その最も顕著な語りとして、同地が「獣(虫)一匹殺してはならない、または草木一本採ってはならない」禁猟区・保護区とされることがあげられる<sup>5)</sup>。

ところで、カミ山には、「オボツ山」、「モリ山」、「ゴンゲン山」、「テラ山」などの複数の別称がある。なかでも、加計呂麻島では、カミ山を「オボツ山」と呼称することが最も多く、それに次いで多いのが「モリ山」である〔鹿児島民俗1970:130〕。ちなみに、オボツ山には、「天の神」とされる「オボツ神(オボツカグラ)」が祀られる場とされる。他方、「ゴンゲン山」や「テラ山」は、一般的に「オボツ山」や「モリ山」に比べやや低いカミ山に対して使われる傾向が認められる<sup>6)</sup>。ただし、「ゴンゲン山」の多くには秋葉権現が祀られているのに対し、テラ山には巖島神社が祀られている場合が多いため〔鹿児島民俗1970:163-164〕、カミ山に対する呼称の違いは、単なる高低による呼び分けではなく、そこに祀られている祭神の違いに由来する可能性も指摘できる。とはいえ、こうしたカミ山と祭祀の関係性から、奄美地方が琉球と日本本土の信仰とが複雑に絡み合った地域であることが窺い知ることができる。



図3 加計呂麻島・薩川集落のカミ道

カミ山には、通常、山頂や中腹から集落を通過して海辺の浜まで通じる「カミ道」と呼ばれる一本の道が敷設されている(図3)。このカミ道も、かつてはカミ山と同様に神聖な場所と認識され<sup>7)</sup>、神や祖霊がカミ山から集落へと降りるために通る道であり、またこの道を通して神や祖霊はカミ山へ帰るとされていた。

また、カミ道は、物理的に実在する地理的空間というだけではなく、琉球の「ニライカナイ」あるいは奄美で「ネリヤカナヤ」<sup>8)</sup>などと呼ばれる、神や祖霊が暮らす常世の国に繋がっている、という観念もある。このように、カミ山やカミ道は、奄美群島のみならず琉球列島にまで広がる異(他)界観念を、集落を中心として山と海に囲まれた景観に読み込んだものと見なすことができる。

いっぽう、カミ山とカミ道との関連で注目すべきものとして、集落の中心に設けられる「ミヤー」という祭祀・儀礼などを行うための広場がある。この「ミヤー」と称される広場には、「アシャゲ」(図4)と「トネヤ」(図5)<sup>9)</sup>と呼ばれる祭祀施設が敷設されるとともに、カミ山に繋がるカミ道を通

ている(図6)。

上記のように、カミ山を中心とする景観認識は、現実の物理的な空間構成も規定し形作っている。実際、集落の居住地や墓地は、カミ山・カミ道との関係性で配置・デザインされている。換言するならば、視覚的に捉えられる集落の物理的な景観構成は、信仰と関連する象徴的な景観認識によって構築されている、といっても過言ではない。

なお、物理的・象徴的両面にわたって集落景観を構築するカミ山・カミ道は、カミあるいは祖霊を迎える旧盆の儀礼的实践にとって、非常に重要な意味・役割を担っている。奄美地方でも、毎年、旧暦の盆に神や祖霊を迎える儀礼・祭祀が世帯単位から集落単位で執り行われるが、同地域では神や祖霊は、前述のように海の果てにある常世の国(ネリヤカナヤ)から戻ってくる、と考えられている。そのため、旧盆には、まず神や祖霊を浜で迎え(図7)、カミ道を通して集落に招き入れミャーで儀礼・祭祀を行い、そこからカミ道を經由してカミ山まで連れて行き最終的な儀礼・祭祀を執り行う、という一連の儀礼行為が展開される。そして、この一連の儀礼行為を(かつて)中核的に執り行っていたのが、「ノロ」と呼称される伝統信仰を司る祭祀集団であった。

## (2) 奄美・加計呂麻島のノロ祭祀

「ノロ」とは、奄美群島を含め琉球列島全域を統治していた琉球王府から正式に辞令を受け<sup>10)</sup>、各集落の儀礼・祭祀を執り行っていた女性の神職(司祭)のことである。ちなみに、ノロを中心とする祭祀集団の基本構成は、世話役である「グジ」一人を除くと、「カミニンジョ(神人衆)」とされる役職はすべて女性である[下野1986:190]。

ノロ祭祀は、現在、沖縄諸島と奄美群島において発達した、琉球文化圏に広がる信仰の一形態として位置づけられている[宮城1979]。このため、ノロ祭祀は、一般に沖縄諸島固有の在地信仰と認識・理解されることが多いが、その信仰観念や文化的影響は奄美地方においても少なからず見受けられる。さらに、琉球信仰と一括されるノロ祭祀であるが、沖縄諸島のものと奄美群島のもの間には、類似点以上に相違を数多く見出すことができる。

ノロは、通常、琉球国王の「おなり神」である<sup>きこえのおおきみ</sup>聞得大君から公式に任命され集落の祭祀を司る、との理解が一般的になされている。だが、奄美地方・加計呂麻島では、必ずしもこの限りではなく、ノロの位/役職の継承は琉球王府からの辞令書ではなく集落内の特定世帯によって世襲制されていた。また、祭祀集団であるカミニンジョ(神人衆)についても、基本はノロを筆頭として男性である「グジ」を含んだ数名の「カミンチュ(神人)」で構成されるが、実際には集落によって構成人数やカミンチュ



図4 加計呂麻島・芝集落のアシャゲ

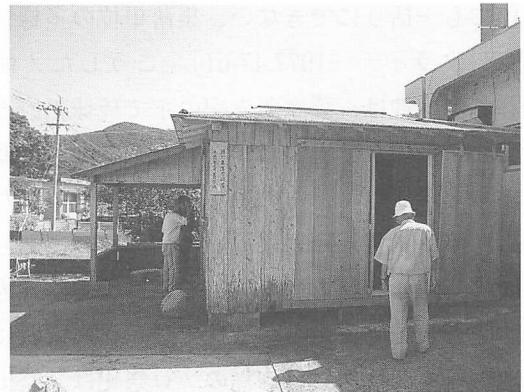


図5 加計呂麻島・薩川集落のトネヤ

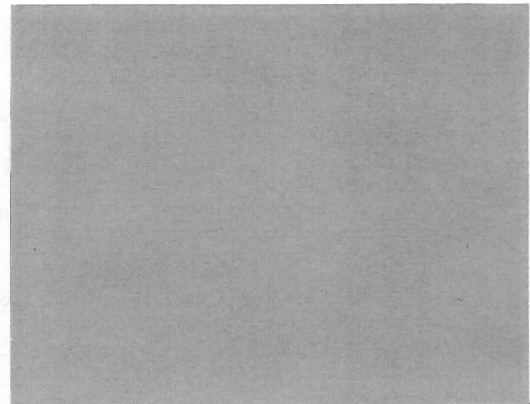


図6 奄美地方の集落景観の概念図

撮影：奄美パーク展示室

の呼称に相当な違いがある<sup>11)</sup>。くわえて、同島の幾つかの集落では、常時ノロが不在なため、他集落のノロを招き迎えて祭祀を行っていたことが知られている。さらには、奄美地方では、祭祀そのものにも集落ごとの差異を認めることができる。なかでも、加計呂麻島では、近隣の集落と連携することなく、各集落が個別に完結した祭祀が行われていた。こうした傾向は、毎年、旧盆の15日に各集落で行われる、豊年祭のあり方に現在でも窺うことができる<sup>12)</sup>。

上記のように、加計呂麻島のノロ祭祀には、同島内だけでも一括りにできない、集落単位の多様性が認められる [クライナー1977:47-61]。こうしたノロ祭祀にかかわる多様性は、薩摩藩支配の下で琉球王府との直接的な交渉・関係が断絶した、という奄美地方の歴史的背景によって形成されたとの想定が成り立つ。またそれとともに、集落単位の顕著な違いは、同じ島にありながら集落間の交流が容易ではない、という地理的要因も少なからず関与していることが指摘できる。いずれにせよ、奄美地方とりわけ加計呂麻島のノロ祭祀は、歴史的・地理的要因などが積み重なって、沖縄諸島とは異なる地域ごとの独自性が形成されたと考えられる。

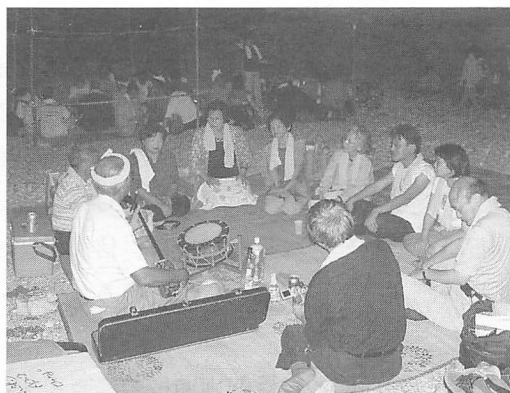


図7 徳之島・井之川集落の旧盆行事

## 5. ノロ祭祀のコスモロジーと山の景観

加計呂麻島北西部の各集落には、カミ山・カミ道などの祭祀空間として付置される景観認識が構築されていた<sup>13)</sup>。また、そうした景観認識は、ノロ祭祀という奄美群島から沖縄諸島一帯に広がる在地信仰に基づくものであった。もっとも、加計呂麻島における景観認識は、集落ごとに差異があり多様性が認められるものであった。

とはいえ、加計呂麻島北西部の複数の集落では、同地域における祭祀空間としての山の景観が必ずしも各集落単位で完結するものではない、という可能性を窺わせる地域住民の方々の語りが少なからず認められる。たとえば、地域住民の方々にカミ山に関する環境認識についての聞き取りを行うと、時折、カミ山以外に重要な山として「高鉢山」や「弓師岳」などの具体的地名について言及されることがある [大西・角南・石村2009;大西2010;2011]。また時には、これらの山は、カミ山以上に重要なものと語られることがある [大西・角南・石村2009;大西2010;2011]。だが、その理由を尋ねても、明確な回答が返ってこないことがないか、あいまいな回答であることがほとんどである。

これに対し、加計呂麻島の地形を鳥瞰すると、北西部には、周辺の山々よりも標高の高い三つの山が北から南に順に並んでいることが見て取れる。そして、この三つの山が高鉢山、弓師岳、嘉入山である(図8)。さらに、各集落のすべてのカミ山は、これらの三つ山に繋がる尾根筋の縁辺であることがわかる(図9-1.2.3)。

以上から、加計呂麻島北西部のカミ山は、同地域の三ピークである高鉢山、弓師岳、嘉入山を中心に配置されていた。こうしたカミ山の配置は、実際の自然地形を背景とした景観認識であることは疑いないだろう。

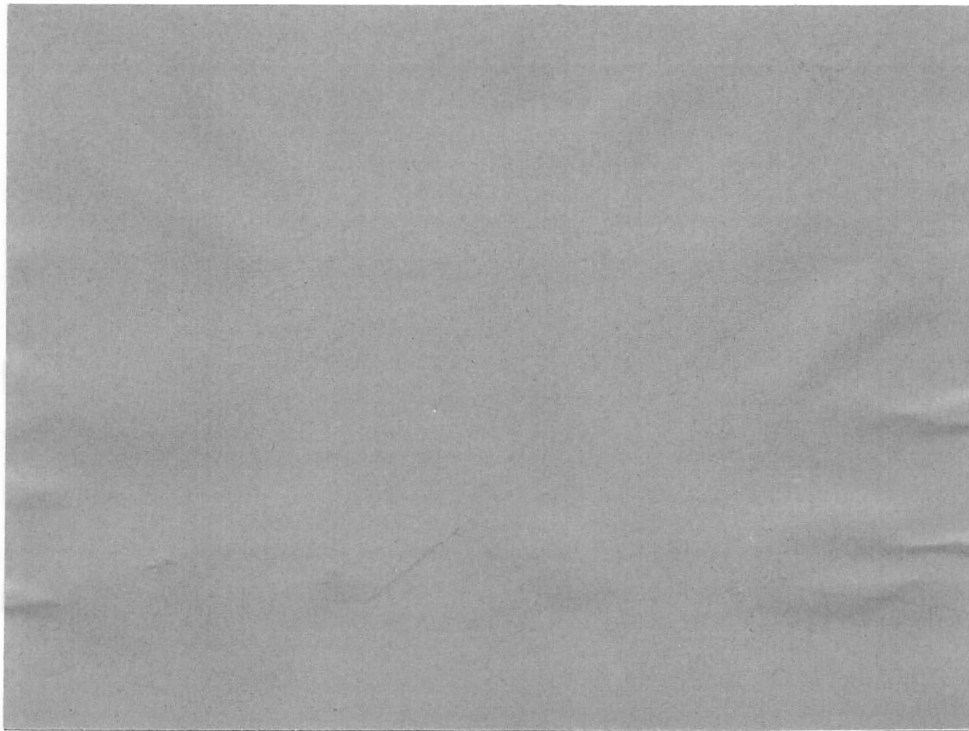


図8 加計呂麻島北西部3高峰（高鉢山・弓師岳・嘉入山）

とすれば、なぜ地域住民は、この景観認識を明瞭に共有していないのか、という疑問が提起される。もっとも、現在は、カミ山に関する景観認識そのものが高齢世代のみに限定され、急速に薄れているただなかにあるため [大西・角南・石村2009;大西2010;2011]、三ピークを中心とする景観認識も、その一環で失われて行った可能性も否定できない。

しかし、地域住民に明確な景観認識が共有されていない理由は、必ずしも世代の断絶のみに帰され

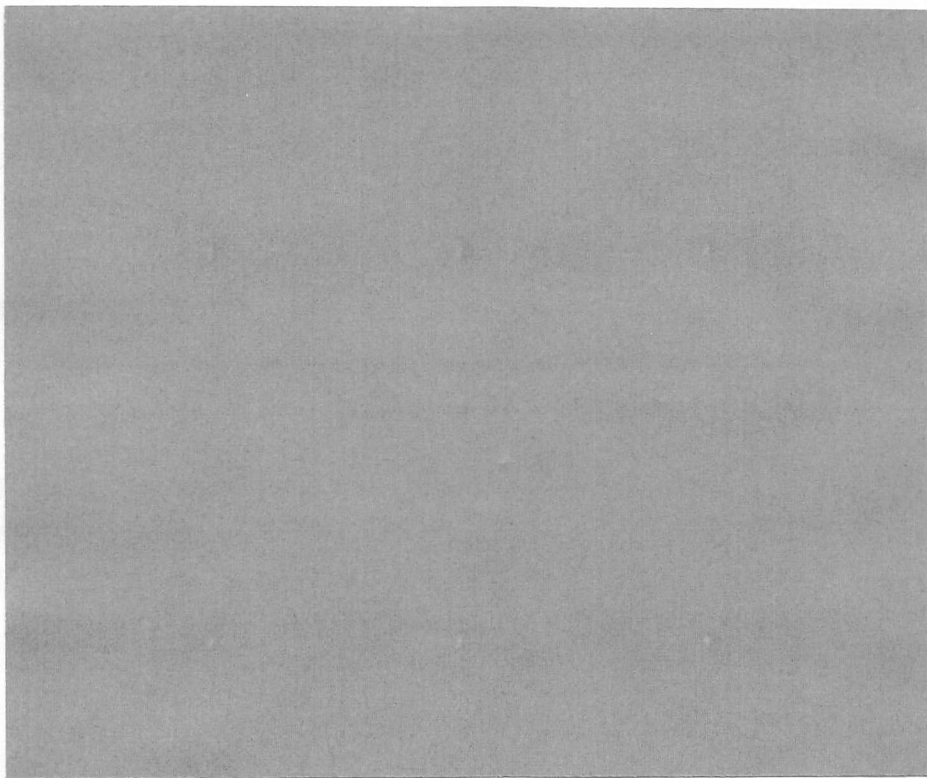


図9-1 加計呂麻島・薩川集落のカミ山の位置

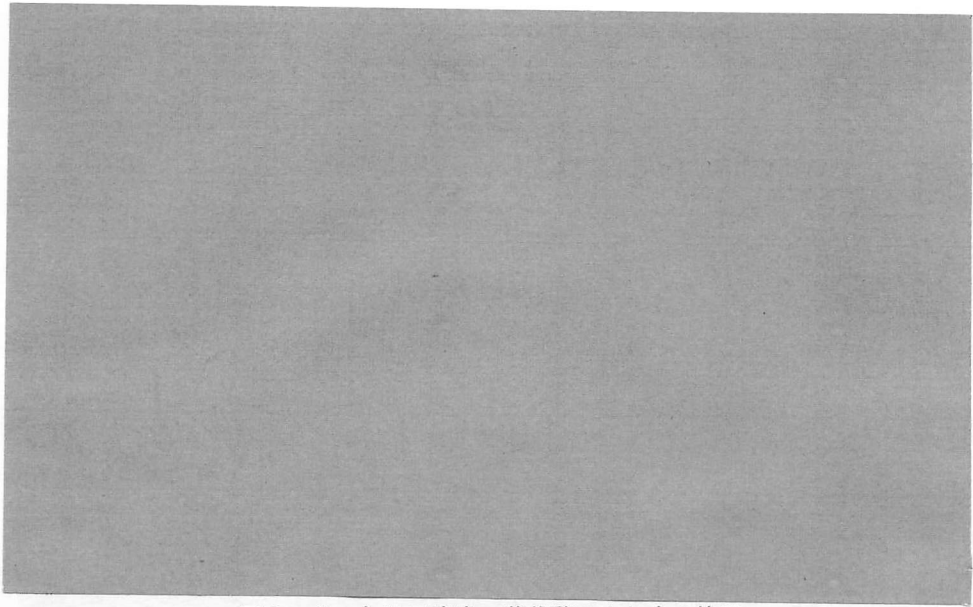


図9-2 加計呂麻島・芝集落のカミ山の位置

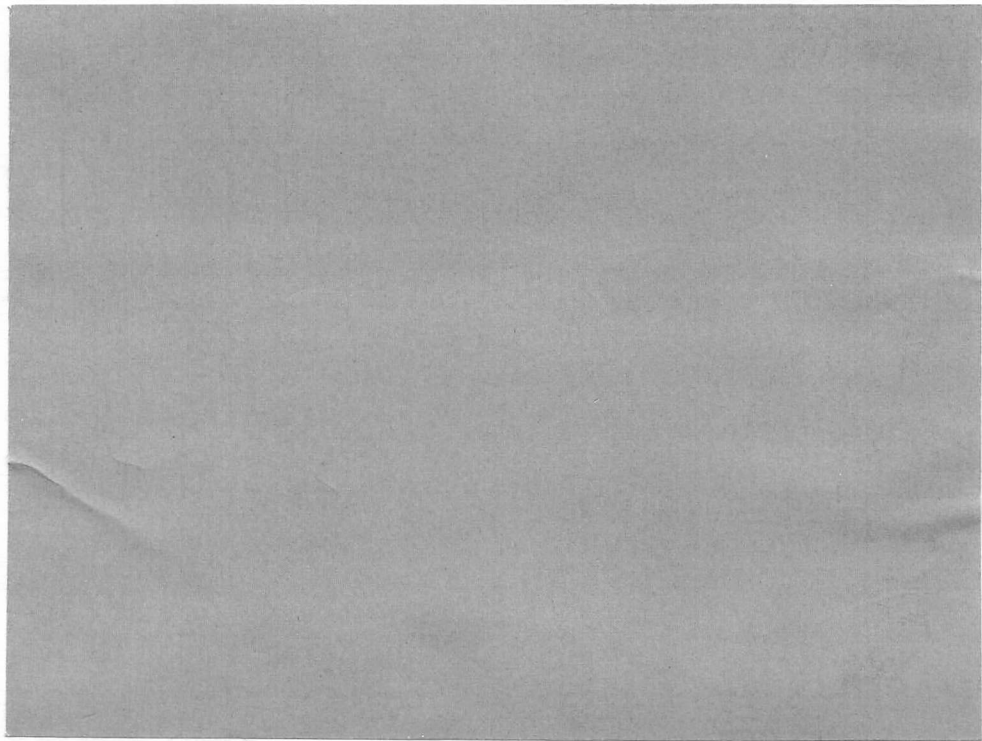


図9-3 加計呂麻島・俵集落のカミ山の位置

るとは限らない。というのは、ノロ祭祀に関する知識の少なからずが、一般の村人には秘匿されていたからである。実際、ノロ祭祀を司る祭祀集団は、一人ひとり集落に暮らす一住民であるものの、その祭祀・儀礼に関わる知識は基本的に内部で保持していた。さらには、ノロ祭祀の儀礼行為のなかには、一般の村人を排除して実践されることが少なくなかった。

上記のことを踏まえるならば、一般住民の間に高鉢山、弓師岳、嘉入山を中核とするカミ山配置の景観認識が不明瞭な理由は、この景観認識がノロ祭祀集団のみに共有される世界観（コスモロジー）であったためである、との想定が成り立つ。

奄美地方・加計呂麻島におけるカミ山に代表される景観認識は、儀礼的实践の場として役割を果た



し非常に重要な文化・社会的意味を持っていた。また、その景観認識は、ノロ祭祀という信仰体系によって支えられていた世界観（コスモロジー）でもあった。ただし、それらは、地域住民すべてが均等かつ一律に共有されていたわけではなく、ノロ祭祀集団と一般住民の間に大きな断絶があった、という可能性が提起できる。

## 6. 万葉世界のコスモロジー

奄美地方・加計呂麻島における景観認識とコスモロジーは、万葉集の歌人たちが詠んだ山々の景観認識やコスモロジーを読み解く上で、どのような役割を果たすだろうか。たとえば、奄美のノロ祭祀のなかに奈良時代以前の「古代信仰との共通基盤」を見出し、直接的な読み解きを試みる、という方法が想定できる。この方法は、民俗学や宗教学などの研究成果を踏まえる限りにおいて、決して荒唐無稽なものではない。であるならば、この選択は、ある意味で本稿の成果を最も有効かつ正当に使う方法となるだろう。

しかし、ここでは、そうした選択は採らない。そうではなく、本稿では、加計呂麻島北西部の山々に対する景観認識やコスモロジーが個々人の出自、世代、地位、職種などによって異なっていたことに注目すべきである。というのは、これをモデルとして改めて万葉集のなかの山を題材として詠まれた歌に対峙するならば、ひとつの新たな読み解きが可能性となるからである。

それは、それぞれの山の歌を詠んだ歌人の出自、世代、地位、職種、性別など個人的属性に注目することによって、その歌人がどのような景観認識やコスモロジーを有していた人物であったのか、という読み解きである。冒頭にも述べたように、万葉集には、さまざまな出自、世代、地位、職種、性別、地域の人びとが詠んだ歌が編纂されている。であるからこそ、この読み解きは、非常に多様な視点や解釈が得られる可能性を孕んでいるといえよう。

一例をあげるならば、三輪山や大和三山に対する信仰は、当時、どのような社会階層の人物の間に共有されていたのか、という問いを探ることが可能となる。また、都から遠く離れた富士山を都人も詠んでいるが、そうして歌人は、どのような景観認識やコスモロジーを有していたのだろうか。この他にも、まだまだ読み解くことのできる問題は尽きないだろう。

もっとも、そこで得られる結果は、万葉集の世界をよく知る者にとって、既知の常識であるか、あるいは陳腐な雑学に過ぎないかもしれない。だが、万葉集の理解を超え、その歌を詠んだ歌人たちのコスモロジーに迫ろうとする限りにおいて、歌人たちの景観認識を読み解いて行くことは、決して単なる既知の常識の確認や陳腐な雑学の収集などに止まるものではなくなるだろう。

### 註

- 1) ちなみに、「古今集」や「新古今集」には、チョウを詠んだ歌が編纂されている。このことから、チョウが歌の題材とされていなかったのは、「万葉集」が編纂された時代に限定されることが指摘できる [日高2003: 82]。
- 2) 文化的景観は、さまざまな研究分野において注目を集めている。とりわけ、欧米では、人文社会科学から自然科学までの既存の研究分野に跨る複合領域としての「景観研究 (Landscape Studies)」が組織され、文化的景観にかかわる数多くの成果が提起されている。
- 3) これらの山々は、万葉集が詠まれる時代においても、信仰対象であったことが知られている。たとえば、「古事記」や「日本書紀」には、三輪山を御神体とする大神神社の祭神である大物主神の伝説が載せられており、そのなかで三輪山は神の鎮座する「神奈備」の山と記されている。
- 4) ちなみに、「那覇世」以前の時代区分は、「奄美世」という呼称が提唱されている [穂積2000]。

- 5) その結果として、カミ山では、生物多様性が守られ、奄美地方の原生林的な生態系＝自然環境が維持されている場として近年にわかに注目を集めている。
- 6) ただし、「テラ山」や「ゴンゲン山」は、一部の集落や住人によってはカミ山とは見なさないケースがある [大西・角南・石村2009;大西2010;2011]。
- 7) ただし、カミ道については、カミ山のような厳密な禁忌があるわけではなく、現在の地域住民の方々多くは普通と変わらない道として扱われている。とはいえ、集落の土地整備や家の建て替えなどに際して、カミ道に掛かる部分がある場合、壁や築地で完全に遮断することを避け、わざと一部開けておくケースが少なからず見受けられることから、一定程度の特別視・配慮がなされているようである。
- 8) 「ネリヤカナヤ」という呼称は、近年になって頻繁に使用されるようになったものであり、必ずしも過去には一般的ではなかったようである。
- 9) 「アシャゲ」は、ノロ祭祀が行われる建物であり、壁や床の無い茅葺屋根の簡素なつくりの小屋である。他方、「トネヤ」は、壁や床があり、なかには畳も敷いてあるような民家風の建物であり、その内部は神祭を行う祭場と炊事場とに分かれている [鹿児島民俗1970:132]。なお、アシャゲは主に祭りのみを行うが、トネヤの内部には小さな神棚がおかれ祭事に用いる太鼓や扇などが祀られている。ちなみに、近年、アシャゲもトネヤも、立て替え時に茅葺屋根からトタンやコンクリート造りになるなど時代とともに変化している。
- 10) ノロは、本来、琉球国王の「オナリ神」である<sup>きこえのおおきみ</sup>聞得大君からの辞令を受けることによって、公に神役を司る権威の裏づけを得ていた。
- 11) 加計呂麻島の祭祀集団は、その中核であり最高位とされる「ノロ」、ノロのとは異なる神役としての「ワキノロ」、ノロに次ぐ地位にある「グジ」、その他の神役として「スドゥ」や「ワキガミ」などの神役があった [クライナー1977:50]。
- 12) 豊年祭は、集落の住民が一丸となって、一年間にわたって様々な準備が行われる。また、こうした準備は、個々の世帯が独自に行うわけではなく、たとえば婦人会や老人会などといった集落ごとに設けられた組織によって運営される。このように、集落ごとに行われる豊年祭は、地域コミュニティの繋がりを再生産するものとなる。
- 13) もっとも、こうした景観認識は、現在、急速に失われつつある。その理由は、加計呂麻島の人口・世帯数が全体の傾向として減少傾向にあり過疎化の一途をたどるとともに、住民の高齢化が加速していることにある。また、こうした過疎化と高齢化は、本調査が目的とする文化的景観にかかわる環境認識の多様性にも少なからず影響を及ぼしている。たとえば、「カミ山」・「カミ道」などの景観認識を成り立たせていた、ノロ祭祀を中心とする儀礼的な年中行事などが、過疎化と高齢化による現地コミュニティの空洞化によって実践されなくなっている実態が認められる [大西・角南・石村2009:91-92]。さらには、こうした社会実態こそが、世代や人生経験の違いに裏打ちされた個々人の文化的景観にかかわる環境認識の多様性を生み出している要因となっている [大西・角南・石村2009:94-100]。

## 参考文献

- 大西秀之 2010 「奄美・加計呂麻島の環境認識に関する第二次調査概報」『現代社会フォーラム』6 pp.89-108  
同志社女子大学社会システム学会
- 大西秀之 2011 「奄美・加計呂麻島の環境認識に関する第三次調査概報」『現代社会フォーラム』7 pp.83-103  
同志社女子大学社会システム学会
- 大西秀之・角南聡一郎・石村智 2009 「奄美・加計呂麻島の環境認識に関する第一次調査概報」『現代社会フォーラム』5 pp.90-101 同志社女子大学社会システム学会
- 鹿児島民俗学会(編) 1970 『奄美の島かけろまの民俗』第一法規出版株式会社
- 鮫島正道 1995 『東洋のガラパゴス』南日本新聞社
- 下野敏見 1986 『南日本民俗の探求』八重岳書房
- 高梨 修 2005 『ヤコウガイの考古学』同成社
- 日高敏隆2003 『動物と人間の世界認識』筑摩書房

- 穂積重信（編） 2000 『奄美の歴史と年表』 徳之島郷土研究会
- 松原武実 2004 『奄美加計呂麻島のノロ祭祀』 岩田書院
- 松原武実・高橋一郎 1998 『加計呂麻島の呂祭祀調査報告(旧実久村編)』 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 宮城栄昌 1979 『沖縄のノロの研究』 吉川弘文館
- クライナー, ヨーゼフ 1977 『南西諸島の神観念』 未来社
- 渡邊欣雄 1985 『沖縄の社会組織と世界観』 新泉社
- Antrop, M. 2000. Background concepts for integrated landscape analysis. *Agriculture, Ecosystems and Environment*, 77, 17-28.
- Tress, B., G. Tress., H. De camps & A.-M. d'Hauteserre 2001. Bridging human and natural sciences in landscape research. *Landscape and Urban Planning*, 57(3-4), 137-141.
- Tress, B., G. Tress, & G. Fry 2005. Integrative studies on rural landscapes: policy expectations and research practice. *Landscape and Urban Planning*, 70(1-2), 177-191

Onishi, Hideyuki

Doshisha Women's College of Liberal Arts

